



今月号から、ジョン・ホワイトフ
ォード神父の文章の一部を皆さん
と共に読んでいきたいと考えてい
ます。「聖書のみ」という言葉は皆
さんも聞かれたことがあるかと思
います。しかし、その教えは本当に
正しいものなのでしょうか。果たし
て本当に初代教会の信仰を受け継
ぐものなのでしょうか。

「聖書のみ」という教えは多くの誤った 前提に基づく教えである

前提とは、はじめから当たり前である
と人々に受け入れられている類のもの
です。それも、全く無意識に受け入れら
れていることも良くあります。その前提
が正しいければ、「**聖書のみ**」という教えは
何もかもうまく
いきます。けれ
ども誤った前提の上
に立てば、必然的に誤
った結論へと導かれます。たとえ無意識
に誤った前提の上に立とうとも、自分の
結論が明らかに誤っていることが分か
れば、根本的な誤りがどこにあるのだろ
う、と自問して欲しいものです。プロテ
スタントは、二万以上もの様々なグルー
プへと別れてしまいました。彼らは、聖
書は何を言っているのか、あるいはクリ
スチャンになるとはどういうことなの
か、といった基本的な事柄に関して一致

道央宣教セミ・ブロック機関紙

(札幌・小樽・苫小牧)

会 報

2024.3.1. No.406

札幌ハリストス正教会 発行 苫小牧ハリストス正教会

発行責任者 管轄司祭 エフREM後藤悠太



〒062-0042 札幌市豊平区福住 2 条 2 丁目 3 番 1 号

TEL:011-852-5644 FAX:011-856-0818

郵便振替 02790-8-4469

<http://www.orthodox-jp.com/sapporo/>

E-mail haris-sp@bz01.plala.or.jp

本当に正しいのか(1)

ができていません。もしプロテスタント
の人々の中に、今のこの状況を真摯に見
つめようという人がおられれば、プロテ
スタントの考えや、「聖書のみ」という
根本的な教えは神から受けたものであ
る、とするにもかかわらず、なぜこのよ
うな事態に陥ったのだろうか、と自問し
なければいけません。(もし聖伝は必要
なく、聖書で十分
であるとするなら)
バプティスト派、エホ
バの証人、カリスマ派、メソジストが皆
聖書に書いてあることを信じている、と
言っているにもかかわらず、どのグルー
プをとっても聖書が書いてあることに
ついて互いに同意できないのはなぜで
しょうか。彼ら自身、まずい状況が大
なり小なり広がっている、と気づいてい
ることは明らかです。しかし残念なことに、
多くのプロテスタントの人々は、このよ
うな悲惨な現状を根本的な問題以外の

もの(それも根本的な問題以外であればどんなものでも)に原因があるとしてきました。プロテスタントの人々にとって、「聖書のみ」という考えはあまりに根本的な考えです。ですからその考えを疑問視することは、彼らにとって神を否定することに等しいのです。しかし私達の主は「すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」(マトフェイ 7:17)と言われました。「聖書のみ」という教えをその実から判断するなら、この「聖書のみ」という木は「切られて、火の中に投げ込まれる」(マトフェイ 7:19)べきである、という結論以外ありません。

聖書は信仰、信仰生活、礼拝に関して最終的な決断を下す、という意図で書かれたものなのか。

a) 聖書は聖書で十分と教えているか。

「聖書のみ」の教えを支えている最も明白な前提は、クリスチャンとしての生活を営むにあたって、必要なことが全て聖書の中に書かれている、という前提です。クリスチャンの生活に関わることは、正しい信仰、習慣、信仰生活、礼拝のために必要とされるもの、ということです。この考えを支持するものとして、最も頻繁に引用される聖書の箇所は以下の部分です。

幼い時から、聖書に親しみ、それが、ハリストス・イイススに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与える書物であることを知っている。聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられ

た者になるのである。

(ティモフェイ後 3:15-17)

「聖書のみ」を主張するためにこの聖書の箇所を引用する人々によると、この箇所は聖書が「あらゆる必要を満たしていること」を教えているのです。というのも、「もし聖書によって、敬虔な人が完全にととのえられた者になれるとするのであれば、完全さに到達することができるのなら、聖伝など必要ない。」ということなのです。しかし実際のところ、この聖書の箇所に基づいてどういえるのでしょうか。

まずはじめに問わなければいけないことがあります。それは、聖使徒パウエルがティモフェイが幼い時から慣れ親しんでいた聖書と言った時、その「聖書」とは何のことを指しているのか、ということです。パウエルが新約聖書のことを言っているのではない、ということは確実です。なぜならティモフェイが幼かった時、新約聖書はまだ書かれていなかったからです。このティモフェイ宛の書簡が書かれた頃、新約聖書はまだ書き終わられていた訳ではありません。ましてや、今日の私達が知っているような、正典の新約聖書として一つにまとめられていた訳でもありません。ここでは明らかに、そして新約聖書の中で「聖書」と言及される時はたいていそうなのですが、パウエルは旧約聖書のことを「聖書」と言っています。ですから、もしこの聖書の箇所を霊的な権威を制限するために使うのであれば、聖伝どころかこの聖書箇所自体も、そして新約聖書全体までが除外されることになってしまいます。

第二に、パウエルが聖伝を益のないものとして除外するつもりなら、なぜ彼は同じ章の中で聖書には載っていない口頭の伝承を使っているのか、と疑問に思

うことでしょう。イアンニイ(ヤンネ)とイアムブリイ(ヤンブレ)という名前は旧約聖書には見られませんが、ティモフェイ後書3章2節でパウエルはモイセイに逆らった者として彼らについて言及しています。出エジプト記(7章、8章)の記事に出てくる二人の最も有名なエジプトの魔術師の名前はイアンニイとイアムブリイである、という口頭の伝承にパウエルは依拠しています。そして新約聖書で正典の聖書以外の情報が使われているのは、この一度だけではありません。最も知られている例は聖使徒イウダの公書です。聖使徒イウダはエノク書から引用しています(イウダ書14、15節、またエノク書1:9を参照)。

教会は聖書のいくつかの書を公式に



イウダ公書の写本 3-4世紀

正典であると認めました。権威を持った書のリストをつくり、そのリストを聖書であると認めるべきであるとししました。その主な目的は、誤まりがある書を退けて教会を守るためです。なぜならそのような偽の聖書は、使徒的な権威を主張するものの、実際は異端者がつくったものであったからです(例えばフォマによる福音書)。異端的なグループは自分達の教えを聖伝に基づけることができませんでした。なぜなら彼らの教えは、教会の外から持ち込まれたものであるからです。そのため自分たちの異端的な教えには、裏付けられた根拠があると主張するためには、聖書の意味を捻じ曲げるしかありませんでした。また、使徒の名前を冠したり、旧約の聖人の名前を冠した

新しい書を捏造するしかありませんでした。教会は使徒に起源をもつ聖伝に依拠することで、異端的な教えから自らを守りました。聖伝とは、使徒継承によって、つまり教会の主教や教師は使徒にまで直接歴史的に辿ることができるという事実によって、確かなものであると証することができるものです。そしてまた教会は正教の信仰の普遍性に依拠することで、自らを守りました。その普遍性とは、正教徒は正教の歴史を通じて、また世界の至る所において正教の信仰を受け入れてきたが、その信仰が常に変わることのないものである、ということです。教会は聖書の権威あるリストをつくることによって、自らを守ってきました。そのリストは教会において、神の靈感を受けたものとして、真実の旧約に起源を持つもの、あるいは使徒に起源をもつものとして受け入れられてきたのです。

教会は聖書の正典のリストをつくりました。しかしキリスト教の信仰の全て、教会の礼拝や秩序に必要な情報の全てをその正典の中に詰め込む、という意図は教会にはありませんでした。一つ議論の余地がないほど自明なことがあります。それは聖書の正典を制定するまでの時代の教会が持っていた信仰と礼拝、それらは後の時代の教会の信仰と礼拝と本質的に区別できないものである、ということです。これは歴史的に確かなことです。教会権威が持つ組織的な面に目を向けると、正典という問題を解決したのは、様々な公会議に集まった正教の主教たちでした。正教会では今日でも、教理や規定の問題を解決しなければならなくなった時には、このように主教たちが公会議を開きます。

パイプ椅子の処分



信徒会館 2 階には使用していないパイプ椅子が 50 脚ほどありましたが、信徒会館に収納場所が少ないため困っていました。そこで費用は約 3 万円ほどかかりましたが、2 月 20 日(水)にパイプ椅子を処分業者に引き取ってもらいました。また、11 日(日)の聖体礼儀後には信徒の皆さんにご協力をお願いし、処分するパイプ椅子を玄関フードまで運んでいただきました。ありがとうございます。

今年は深夜の復活祭！

クリスチャンは古代より、深夜に復活祭をお祝いしてきました。深夜であることの理由には、復活祭が過ぎ越しの成就だから、という説明もあるそうです。過ぎ越しの祭りは夕から始まり深夜に終わっていたのに対して、キリスト教の復活祭は、その深夜から始まり明け方に終わっていました。復活祭は過ぎ越しの祭りと同じものなのではなく、むしろその成就なのです。また、ハリストスは朝早くに復活された(ただし、その瞬間を見た者はいません)ということも、深夜に復活祭が祝われることの理由として挙げられることがあります。

しかし、そのような理屈が問題ではないのです。むしろクリスチャンにとって、復活祭は何よりも輝かしい喜びの体験であり続けてきました。暗闇のただ中であって、そこで私達はハリストスの復活の光を体験します。一人ひとりが手に持つろうそくの光は、そして暗闇の中にあっても煌々と輝く聖堂内は、イイススの復活を証します。復活祭の聖体礼儀で読まれる福音はこのように力強く宣言します。「光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。」(イ

オアン 1:8)

トマス・ホプロ神父は、復活祭で暗闇の中行われる十字行の体験を次のように描写しています。「深夜に復活祭の行列(十字行)が始まります。・・・復活祭にクリスチャンたちが行列をなして聖堂を巡っているのを見ると、昔存在した洗礼の行列を思い浮かべることが出来ます。洗礼の行列とは、この世の闇と死から出発し、神の国の光といのちを目指して進んでいくものです。その意味でこの復活祭の行列とは、過ぎ越しの行列なのです。死からのちへの過ぎ越し、地から天への過ぎ越し、この世から終わることのない来るべき世への過ぎ越しです。」



2008 年の札幌教会の復活祭

誦經奉仕者研修会

札幌教会にて3月28日(木)、29日(金)の日程で北海道ブロック誦經奉仕者研修会が開催されます。誦經の実技の研修については、誦經を担当される方のみに限らせていただきます(内容も大斎平日の早課を扱おうと考えていますので、少しだけ難しいです)が、講義と祈祷につきましては信徒の方であれば誰でもオブザーバーとして参加することができます。講義は、そもそもなぜ大斎というものがあるのか、そして何のためにある

のか、といったことについて学んでいきたいと考えています。とても大切な内容だと思いますので、ぜひ参加してみたいかがでしょうか。どちらかの日のみの参加もできます。

なお、オブザーバー参加については申し込みが必要です(オブザーバー参加は無料)。聖堂に申し込み用紙を準備しますので、3月17日(日)までに、お名前と参加できる日程、弁当の必要の有無などを記入していただければ幸いです。

● 3月28日(木)

13:00 開会祈祷／オリエンテーション
13:10 実技「大斎の平日早課に慣れよう」〈※研修参加者対象〉
14:40 講義「そもそもなぜ大斎があるのか?」〈※オブザーバーも参加可能です〉
17:00 晩堂大課、早課、一時課

● 3月29日(金)

8:30 痛悔
9:00 三時課、六時課、九時課、晩課、先備聖体礼儀
12:00 昼食
13:00 質疑応答、まとめ等〈※オブザーバーも参加可能です〉
14:30 閉会祈祷／解散

まもなく大斎

これから大斎準備週間が終わり、いよいよ本格的に大斎へと入っていきます。平日の祈祷の誦經にチャレンジしたいという方は私の方に申し出てください。最初は不安もあるでしょう。しかし「うまく」やることよりも、まず取り組むこと、もっと言えば取り組もうと思ったこ

とこそが大切です。とはいえ神様の前に立つということですから、謙虚な気持ちで前もって準備する、ということもまた大切です。どこを読めばいいんだかさっぱり分からない、等々質問があればぜひ気軽に尋ねてください。



リボウ阪井愛子姉が永眠

リボウ阪井愛子姉が2月15日(木)に永眠されました。コロナ禍にあった3年前から脳梗塞を患い入院されてきました。コロナ禍にあって、面会が制限されたことが大変であったとご遺族の方は話されていました。やわらぎ斎場北円山

別邸にて2月18日(日)に通夜パニヒダ、19日(月)に埋葬式が行われました。ごく近親の方のみで葬儀は行われ、札幌教会からはパルメン傳法執事長にご奉仕をいただきました。永遠の記憶をお祈りいたします。